菊川市埋蔵文化財調査報告書　第17集

子ヶ崎遺跡—第2次調査—
鹿島・打上遺跡—第13次調査—
発掘調査報告書

（耐震性貯水槽設置工事に伴う発掘調査）

平成28年度

2016

菊川市教育委員会

菊川市埋蔵文化財調査報告書　第17集

子ヶ崎遺跡—第2次調査—
鹿島・打上遺跡—第13次調査—
発掘調査報告書

（耐震性貯水槽設置工事に伴う発掘調査）

平成28年度

2016

菊川市教育委員会

例　言

1　本書は菊川市消防本部による耐震性貯水槽設置工事に伴い、平成27年7月13日から8月27日にかけて現地調査を実施した、子ヶ崎遺跡及び鹿島・打上遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

2　本書の編集は菊川市教育委員会社会教育課が行った。

3　調査の体制は次の通りである。

平成27年度

菊川市教育委員会

教　育　長	石 原　 潔
教育文化部長	原 田 修 一
社会教育課長	竹 田 安 寛
文化振興係長	齋 藤 政 巳
文化振興係（指導主事）	蔵 本 俊 明
文化振興係主任主査	髙 木　 淳

平成28年度

菊川市教育委員会

教　育　長	石 原　 潔
教育文化部長	原 田 修 一
社会教育課長	清 水 久 安
文化振興係長	齋 藤 政 巳
文化振興係（指導主事）	蔵 本 俊 明
文化振興係主査	松 下 徳 男

現地作業員

竹内　正明、松下　一男、水島　まさ江、森崎　直司

整理作業員

タマン谷　純子、大川　友子、松永　綾、小林　里枝、熊切　奈津子、相原　里枝

勤労体験学習

菊川市立岳洋中学校　市川　諒、柴田　拓海

※順不同、敬称略

基準点測量

株式会社　フジヤマ

4　本書の執筆は、平成27年度に現地調査を担当した髙木が行い、平成28年度に髙木と蔵本で出土遺物を元に各種検討を行った上で、蔵本が加筆修正・編集を行った。

現地写真は髙木が、遺物写真は蔵本、市川、柴田が撮影した。

5　本書に収録した実測図・写真及び出土遺物は、すべて菊川市教育委員会が保管している。

目　次

第１章　調査概要
（１）調査に至る経緯……………………………………………… 1
（２）調査の方法……………………………………………………… 1
第２章　調査成果
Ⅰ　子ヶ崎遺跡
（１）遺跡の位置と環境…………………………………………… 3
（２）調査結果………………………………………………………… 6
Ⅱ　鹿島・打上遺跡
（１）遺跡の位置と環境…………………………………………… 10
（２）遺跡の調査履歴……………………………………………… 10
（３）調査結果………………………………………………………… 14
第３章　まとめ……………………………………………………… 18

参考文献
報告書抄録

挿図目次

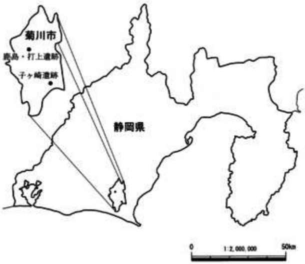
第１図　菊川市位置図
第２図　調査対象遺跡位置図……………………………………… 2
第３図　子ヶ崎遺跡周辺遺跡図…………………………………… 4
第４図　子ヶ崎遺跡発掘調査位置図……………………………… 5
第５図　子ヶ崎遺跡遺構全体図…………………………………… 6
第６図　子ヶ崎遺跡調査区東壁土層断面図……………………… 7
第７図　子ヶ崎遺跡 SD1・SX1 土層断面図 ……………………… 7
第８図　子ヶ崎遺跡出土遺物実測図……………………………… 9
第９図　鹿島・打上遺跡周辺遺跡図……………………………… 11
第10図　鹿島・打上遺跡発掘調査位置図………………………… 13
第11図　鹿島・打上遺跡遺構全体図……………………………… 14
第12図　鹿島・打上遺跡 SH1・SH2 実測図 …………………… 16
第13図　鹿島・打上遺跡 SD1 土層断面図 ……………………… 17
第14図　鹿島・打上遺跡 SX1 実測図 …………………………… 17
第15図　鹿島・打上遺跡出土遺物実測図………………………… 18

挿表目次

第１表　子ヶ崎遺跡周辺遺跡一覧表…… 4
第２表　子ヶ崎遺跡出土遺物一覧表…… 8
第３表　鹿島・打上遺跡周辺遺跡一覧表…… 12
第４表　鹿島・打上遺跡出土遺物一覧表…… 18

図版目次

図版１　子ヶ崎遺跡完掘状況
子ヶ崎遺跡東壁南端土層断面
子ヶ崎遺跡 SD1 完掘状況
図版２　子ヶ崎遺跡 SD1 土層断面
子ヶ崎遺跡 SD1 遺物出土状況
子ヶ崎遺跡 SX1 土層断面
図版３　子ヶ崎遺跡 SX1 遺物出土状況
子ヶ崎遺跡出土土師器・須恵器
子ヶ崎遺跡出土灰釉陶器
図版４　鹿島・打上遺跡完掘状況
鹿島・打上遺跡 SH1・SH2 検出状況
鹿島・打上遺跡 SH1・SH2 完掘状況
図版５　鹿島・打上遺跡 SD1 土層断面
鹿島・打上遺跡 SD1 完掘状況
鹿島・打上遺跡出土遺物



第１図　菊川市位置図

第1章　調査概要

（1）調査に至る経緯（第2図）

菊川市消防本部では市の防災力を高めるために市内各所において耐震性貯水槽の整備を進めている。その中で、菊川市教育委員会社会教育課（以下社会教育課）に市内南西部に位置する川上地区の川上公民館敷地内、市内北部に位置する打上地区の鹿島公園敷地内での設置工事について埋蔵文化財の有無を照会したところ、前者が子ヶ崎遺跡、後者が鹿島・打上遺跡の範囲内に含まれることが判明した。ともに過去の確認調査結果から遺構が残存しており、開発によって遺構が消滅することが明らかとなった。

そこで、遺跡の取り扱いについて菊川市消防本部と社会教育課で協議し、平成27年度に現地調査、平成28年度に報告書作成を実施することで協定書を締結した。また、調査に係る費用については開発者である菊川市消防本部の予算で負担し、発注や契約に関する事務については社会教育課が執行することとした。

現地調査の調査対象面積はともに87.5㎡で、子ヶ崎遺跡は平成27年7月13日から8月3日まで、鹿島・打上遺跡は8月19日から8月27日にかけて実施した。

事務文書

子ヶ崎遺跡

平成27年7月1日	菊教社第185号	土木工事等に係る埋蔵文化財発掘の通知（進達・副申）
平成27年8月4日	菊教社第254号	子ヶ崎遺跡発掘調査結果概要
平成27年8月4日	菊教社第255号	埋蔵物の保管証
平成27年8月4日	菊教社第256号	埋蔵物の発見届

鹿島・打上遺跡

平成27年7月1日	菊教社第186号	土木工事等に係る埋蔵文化財発掘の通知（進達・副申）
平成27年9月2日	菊教社第290号	鹿島・打上遺跡発掘調査結果概要
平成27年9月2日	菊教社第291号	埋蔵物の保管証
平成27年9月2日	菊教社第292号	埋蔵物の発見届

（2）調査の方法

子ヶ崎遺跡の調査にあたり、計画範囲内に世界測地系に基づいた4級基準点を3点設置した。そのうちの基準杭4K2の座標は、世界測地系でX=−143498.041、Y=−34645.123、標高21.933mである。

鹿島・打上遺跡の調査においても、計画範囲内に世界測地系に基づいた4級基準点を3点設置した。そのうちの基準杭4K5の座標は、世界測地系でX＝−138133.572、Y＝−37889.103、標高32.138mである。

両遺跡とも発掘作業は、バックホウで表土を除去した後に、人力で精査して遺構を検出した。遺構の掘削作業が完了した後に、遺構の測量及び撮影を実施して現地作業を完了した。撮影はデジタル一眼レフカメラ1台と2台の35㎜版フィルムカメラ（カラーネガ・カラーリバーサル）で撮影した。

発掘調査報告書は同一事業での調査であるために、二遺跡の調査成果を一冊にまとめることとし、資料整理作業は子ヶ崎遺跡と鹿島・打上遺跡を並行して進めた。遺構、遺物のトレースを含め、すべての図版はパソコン上で作成した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影した。

第２図　調査対象遺跡位置図

第2章　調査成果

I　子ヶ崎遺跡

（1）遺跡の位置と環境（第3・4図）

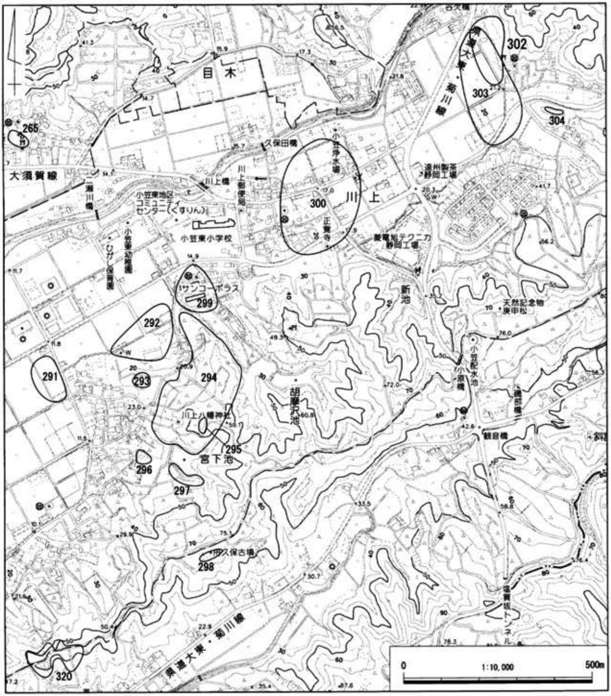
菊川市は東側を牧之原台地上で牧之原市と接し、その台地をいくつもの川が開析し、北東から南西へと丘陵が走っている。子ヶ崎遺跡は菊川市南東部を流れる丹野川沿いの沖積地、東から延びる丘陵の先端付近に立地している。子ヶ崎遺跡の北で古谷川と交わった丹野川は、南西から西へと流れを変えながら、およそ3km南西で牛渕川と合流する。子ヶ崎遺跡の南から西方面にかけては平地が開け水田が広がっているが、今回の調査地点を含め、子ヶ崎遺跡と一部が重複する形で谷田遺跡がかつて登録されていた。子ヶ崎遺跡は古代の散布地、谷田遺跡は弥生·古墳·中世の散布地·集落であったが、現在は子ヶ崎遺跡のみが登録されている。また川上地区は相良から掛川方面へ通じる相良街道沿いであり、現在の小笠東小の東側周辺には行き交う人々のための市が立ったと言われ、市場遺跡が存在する。川上地区にはこの他に子ヶ崎遺跡の南東約200mの丘陵上に漢人山古墳が確認されており、丘陵周辺の平地部において古墳を形成した集落の存在も想起される。

少ないながらも周辺地域での調査報告例を挙げると以下のようなものがある。

宮ノ前遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に埋没した溝1条のほか中近世までの遺物が出土している（小笠町教育委員会1990)。県指定史跡である舟久保古墳は主体部が調査されていないが、古墳時代中期と推定される前方後円墳である(静岡県教育委員会2001)。寺の谷古墳群では朝顔型·形象·円筒などの埴輪が出土するとともに、墳丘の下層より弥生時代後期の溝が検出され丘陵上の集落の存在が指摘された（小笠町教育委員会1991)。

子ヶ崎遺跡では平成17年度に公会堂建設に伴う確認調査において、奈良時代後期から平安時代前期とみられる柱穴や溝が確認された。これが第1次調査であるが、調査面積は約5㎡と狭く、周辺遺跡を含めて川上地区内での発掘調査はあまり進んでいないのが現状である。

子ヶ崎遺跡が位置する川上地区の「川上」の地名は古代の城飼郡にあった11の郷のうちの一つ「河上郷」に由来すると考えられている。なお、子ヶ崎遺跡は現在「こがさき」遺跡として登録されているが、「小笠町地名語源解説　東地区篇」では「ネガサキ　ネは根の意であり、谷欠山の根本にある所ということから起こった地名であろうか。」と記述されている。

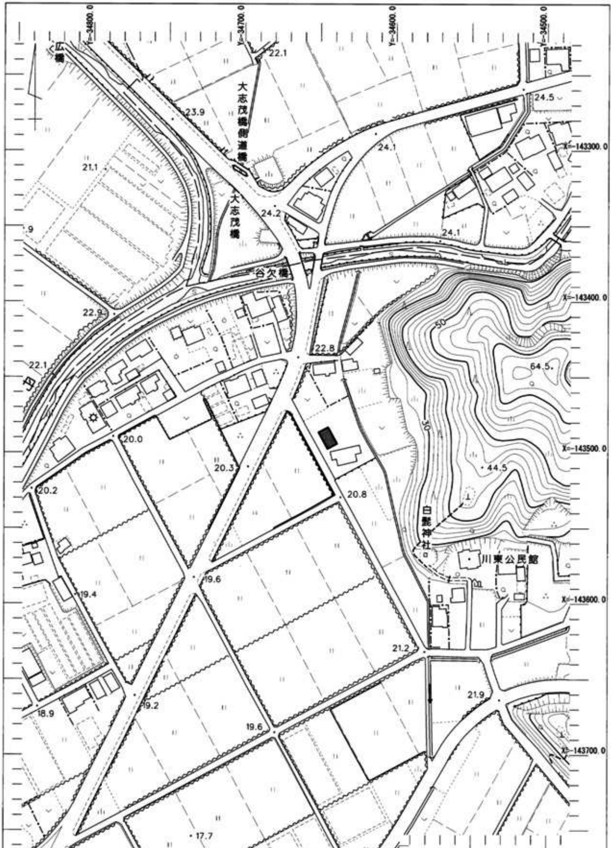


第３図　子ヶ崎遺跡周辺遺跡図

第１表　子ヶ崎遺跡周辺遺跡一覧表

番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名
265	横穴墓	猿渡横穴群	295	古墳	代之谷古墳	300	集落跡	市場遺跡
291	集落跡	榎田遺跡	296	その他の墓	作兵衛屋敷墓地遺跡	**302**	**散布地**	**子ヶ崎遺跡**
292	散布地・集落跡	宮ノ前遺跡	297	横穴墓	宮下横穴群	303	散布地・集落跡	谷田遺跡
293	古墳	宮下古墳群	298	古墳	舟久保古墳	304	古墳	漢人山古墳
294	城館跡	川上城跡	299	散布地・集落跡	太田ノ谷遺跡	320	古墳	寺の谷古墳群

303 谷田遺跡は現在登録されていない。



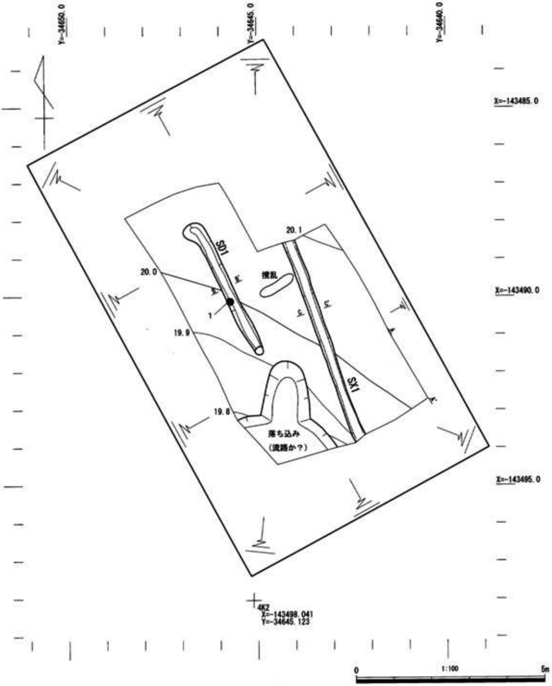
第４図　子ヶ崎遺跡発掘調査位置図

（2）調査結果

遺構（第5・6図）

今回の調査対象範囲は現地表面で 12.5 m × 7 mの長方形である。しかし、第6図に調査区南東部の土層断面を示したように盛土が 1.1 mほどあり、安全を考えて掘削の勾配をとった結果、遺構検出できた面では約 7.7 m × 4.5 mであった。基本土層は盛土の下が旧水田耕作土層（2層）、その下に遺物を包含する灰黄褐色粘質土層（4層）、さらに下が暗茶褐色砂質土層（5層）で上面が遺構検出面である。4層と5層の間には分層できなかったが、1cm以下の砂礫が層状に存在した。

遺構は希薄で溝1条と水田暗渠状遺構が確認されたのみである。調査区南端に流路の可能性を指摘できる落ち込みを検出したが、遺構として認定するだけの確証は得られなかった。



第5図　子ヶ崎遺跡遺構全体図

SD1（第5・7図）

調査区と同じ方向に検出された。検出された長さは3.9 m、幅30cm、深さは12cmである。水田開発等により遺構の大部分が削られていると考えられる。図化できた出土遺物は1の土師器のみである。

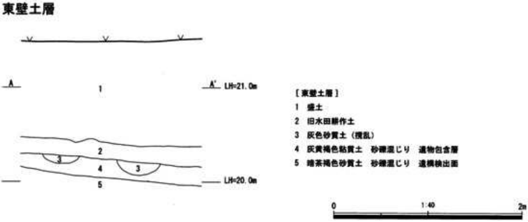
図化した土師器坏以外では須恵器の壺の胴部らしき破片が出土しており、灰釉陶器以降の遺物がみられないことから古代に属する可能性を指摘できる。

SX1（第5・7図）

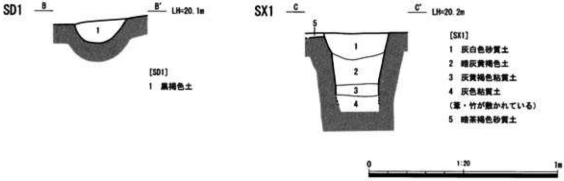
調査区を南北に通るSX1は幅約30cmで垂直に掘り下げ、底に竹やアシなどを敷きつめている。近世の水田暗渠は孔を空けた竹や管を石などで覆って埋める構造であるが、それに比べるとSX1は単純な構造であり、水はけの悪い土地の簡易な地下排水施設としてつくられたものであろうか。

小破片も含め土器片15点を取り上げているが実測できた遺物はなかった。土師質のものは10点であるが､いずれも数cm以下の摩滅が激しい小破片で器種などは不明である。他は古代の須恵器片3点、中世以降の瓦、磁器が各1点である。

出土遺物からは確定できないが、構造から近世以降の遺構とみなせよう。



第6図　子ヶ崎遺跡調査区東壁土層断面図



第7図　子ヶ崎遺跡SD1・SX1土層断面図

遺物（第8図）

遺物は遺構検出面付近で出土している。遺構検出面付近の堆積土は調査区南西部を中心に砂礫が混入しており、丹野川や調査区東側の丘陵からの土砂の流入がたびたびあったものと考えられることから、遺物もほとんどが土砂の流入により周辺から流れ込んだものとみられる。

図化できた遺物は 13 点で、SD1 から出土した 1 以外の 12 点は包含層出土である。

１は土師器、２～９が須恵器、10 ～ 13 が灰釉陶器の碗である。

１は土師器坏の口縁部破片である。摩滅が激しく、調整等は不明である。古墳時代後期に属するであろうか。

２は坏蓋であるが、摘みは剥離している。かえりは低い。３と４は坏身で、３は内面には自然釉が厚く付着している。５は盤である。６は壺底部で外面に自然釉が付着する。７は壺の底部で内面に自然釉が多く付着している。８は甕の口縁から頸部である。頸部に２段の波状文を施し、波状文の間には、やや低いが隆帯をつくっている。口縁部は内外面に断面三角形の突帯を巡らしている。９も甕で底部である。外面にはたたき目が見られるが、内面には当て具痕はなく、横ナデで仕上げられている。

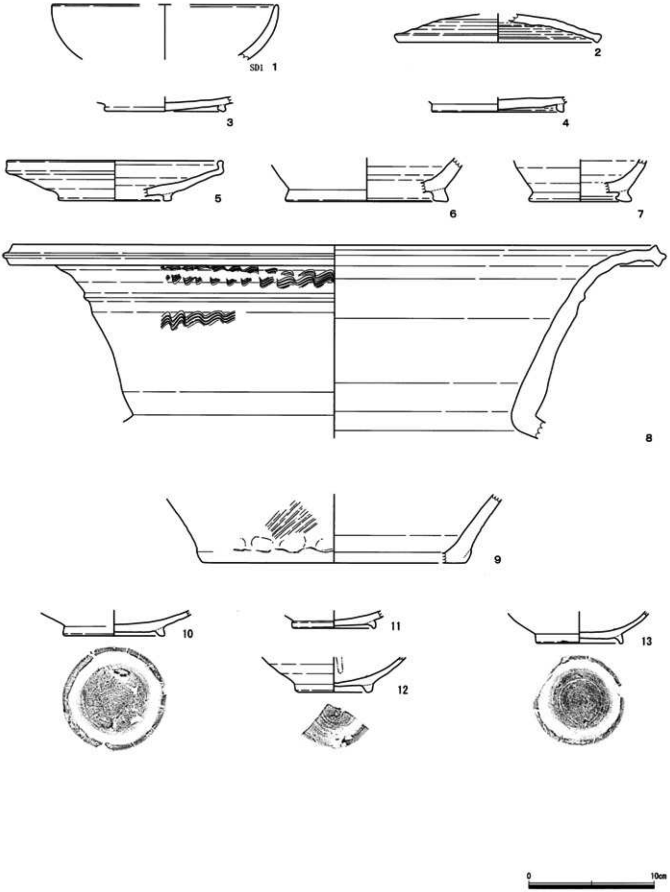
10 ～ 13 は灰釉陶器碗の底部である。11 の高台は低く、すのこ痕がある。底部はケズリ調整か。12 の高台はやや丸みを帯びた台形で回転糸切り痕が残る。13 の高台は籾痕がわずかに見られるとともにすのこなどにあたって変形している所が数ヶ所ある。底部はケズリ調整である。

以上の遺物を通してみると古墳時代後期にさかのぼる可能性もあるが、奈良時代から９世紀後～10 世紀初頭までの時期にほぼ収まり、８世紀末から９世紀中頃に空白があることを指摘できる。

第２表　子ヶ崎遺跡出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土位置・遺構	種別	器種	計測値（cm）				色調	残存部位	残存率(%)	時期	産地	備考
						口径	高さ	底径	高台径						
8	3	1	SD1	土師器	坏	-	(4.4)	-	-	橙	口縁部	破片	古墳後？		
8	3	2	包含層	須恵器	坏蓋	(16.4)	(2.3)	-	-	灰白	口縁部～頂部	25	8C 後	清ヶ谷か	摘み破損
8	3	3	包含層	須恵器	坏身(有台)	-	(1.2)	-	(9.6)	灰白	底部	20	8C 初	湖西	
8	3	4	包含層	須恵器	坏身(有台)	-	(1.2)	-	(10.6)	灰白	底部	15	8C 初	湖西	
8	3	5	包含層	須恵器	盤	(17.3)	3.2	-	(9.0)	灰白	口縁部～底部	20	8C 後	清ヶ谷	
8	3	6	包含層	須恵器	壺	-	(3.5)	-	(12.9)	灰白	底部	25	7C 末～8C 初	湖西	
8	3	7	包含層	須恵器	壺	-	(3.4)	-	(8.2)	灰白	底部	25	8C 前	湖西	
8	3	8	包含層	須恵器	甕	(52.8)	(14.3)	-	-	灰白	口縁部～頸部	20	8C 前	湖西	SX1 に同一個体あり
8	3	9	包含層	須恵器	甕	-	(5.5)	(21.0)	-	灰白	底部	10	8C		
8	3	10	包含層	灰釉陶器	碗	-	(2.1)	-	8.1	灰白	底部	80	Ⅲ - 1	清ヶ谷	
8	3	11	包含層	灰釉陶器	碗	-	(1.4)	-	(6.6)	灰白	底部	70	Ⅲ - 2	清ヶ谷か	
8	3	12	包含層	灰釉陶器	碗	-	(2.8)	-	(6.2)	灰白	底部	25	Ⅳ - 1	皿山	
8	3	13	包含層	灰釉陶器	碗	-	(2.6)	-	6.9	灰白	底部	70	Ⅳ - 1	清ヶ谷か	

径の（）は推定値、高さの（）は残存値



第８図　子ヶ崎遺跡出土遺物実測図

Ⅱ　鹿島・打上遺跡

（1）遺跡の位置と環境（第9図）

菊川市北部は掛川市・島田市との境となる火剣山を最高地点として、南方向に丘陵がいくつも伸びている。市役所がある市中心部まで、もっとも南に伸びているのが高田ヶ原丘陵であり、鹿島・打上遺跡はその丘陵南端、打上原とも呼ばれる段丘状の平坦面に位置している。

高田ヶ原丘陵の南端付近は段丘状に3段から形成されており、最も南の最下段にあたる打上原は過去の発掘調査から縄文時代以降居住域となっていたことがわかっている。

鹿島・打上遺跡が立地する丘陵の西側、西方川流域の低湿地には弥生時代中期の標識遺跡である白岩遺跡を初め多くの遺跡が分布している。狭い沖積地ではあるが、弥生時代以降集落、生産域として利用されたようであり、周辺に集落が営まれたのであろう。

また丘陵の中段、現在常葉菊川高校がある段には高田ヶ原遺跡が存在し、過去の調査では弥生時代の住居跡が検出されている（菊川町教育委員会 1998）。

古墳時代になると、鹿島神社の南には6世紀頃の円墳とみられる鹿島古墳が、一つ上の段には市指定史跡の大徳寺古墳（推定長 63 mの前方後円墳）が、さらに上の段には円筒埴輪列、朝顔形埴輪が出土した高田ヶ原古墳群が存在するなど、段丘上には5～6世紀頃の古墳が造営されており、当時の菊川流域の中心をなす地域の一つであったと考えられる。

高田ヶ原丘陵は東側に JR 菊川駅、菊川市役所が存在するように市の中心域であり、近代以降開発の波にさらされてきた地域である。そのため、白岩遺跡や高田ヶ原遺跡などは古くから知られ、調査も多く行われてきたけれども、断片的な調査であったり、未報告の調査があったりと丘陵周辺の全体像はつかみきれていない部分があることも事実である。

（2）遺跡の調査履歴（第10図）

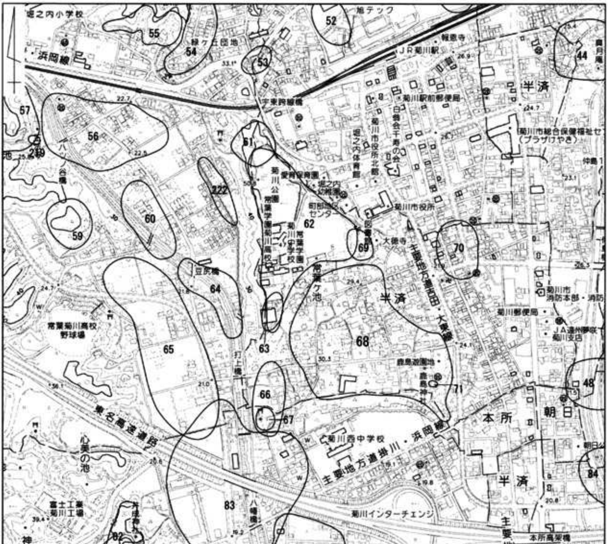
鹿島・打上遺跡は遺跡名と範囲に変更があることと、古い調査の記録が断片的であったことから、調査履歴などが不明な部分がある。ここでは現段階でわかっていることを記述し、整理してみたい。

昭和 39 年再版の菊川町埋蔵文化財地名表では鹿島遺跡と打上遺跡として記載されている。図面では範囲は囲っておらず、遺跡番号が鹿島遺跡は鹿島神社付近、打上遺跡は現在の鹿島・打上遺跡北西端付近に落とされている。鹿島遺跡の「出土品」として、古墳・古代の一覧では「土器　住居址？（平安初～鎌倉初？）」と、縄文式の一覧では「出土品」として「打石斧一片　小型石斧（磨製1本）土器（加曽利E）カメ多数　黒曜石片（奈良カメ、粘土墟跡）（八斗地と併行）」、「状況」として「宅地造成により茶畑を剥り取る。神社境内は遊園地工事中に発見住居跡群、表面、須恵器散在（奈良）」と記述されている。「八斗地」は菊川駅の北に位置する遺跡名で、古代の土器の出土が記載されている。打上遺跡は古墳・古代の一覧表で「出土品」が「土器（須恵）」、「状況」が「表面散布」と記されている。

昭和 56 年度に作成された菊川町遺跡地図では、鹿島・打上遺跡として登録され、鹿島神社周辺のみが実線で、現在とほぼ同じ範囲が点線で囲まれている。種別は散布地、時代は「縄文（中・後）弥生（後）古墳・平安・鎌倉」、遺構は空欄である。

平成3年度の調査報告書（菊川町教育委員会 1992）では、昭和 56 年度の実線の範囲は鹿島遺跡、点線の範囲から鹿島遺跡を除いた範囲が打上遺跡として記載されている。

平成 13 年度に行われた埋蔵文化財包蔵地カード作成時の整理により、鹿島・打上遺跡として現在の範囲が指定されている。



第９図　鹿島・打上遺跡周辺遺跡図

昭和40年代から亡くなる平成３年までに菊川町文化財専門審議会会長、菊川町議会議長、菊川町教育委員長などを歴任された故鈴木則夫氏の資料が寄贈され、菊川市教育委員会に保管されている。その資料の中に昭和38年２月頃に今回の調査地点から道路を隔てた北側で宅地造成が行われた際の記録である、手書きの「鹿島遺跡概況報告」がある。

その報告によると茶畑を削平した断面に竪穴式住居２軒、うち１軒では埋甕と思われる深鉢が２個体検出されている。このことから、縄文時代中期には集落が営まれていたと考えられる。また「平安時代」の住居跡が鹿島公園入口の道路法面（第13次調査地点の北西）に露出していると図中に示されている。

この報告の本文は万年筆で書かれているが、保護のためと考えられるトレーシングペーパーの表紙には鉛筆で遊園地周辺の図が書かれている。この図によると遊園地東側に竪穴住居跡が３軒確認されたようである。南端には「平安」、中央には「中期」と記入してある。北端には「口跡」の記述があるが、「ろ（炉）跡」の意味であろうか。

一方、昭和62年３月発行の「上半済打上五丁目郷土誌」では昭和38年６月から遊園地の整備が始まり、同時に北側に出入り口を作ったと記されていることから、鈴木氏報告の表紙の図はこの時の記録であると考えられる。

菊川市教育委員会が2006年に発行した報告書では、平成３年度調査を第２次、平成17年度を第８次としている（菊川市教育委員会 2006）。更なる混乱を防ぐためにも、発見の経緯は異なるが、昭和38年２月の宅地造成時と同年６月の遊園地整備時の記録を合わせて第１次調査とみなすのがよいであろう。

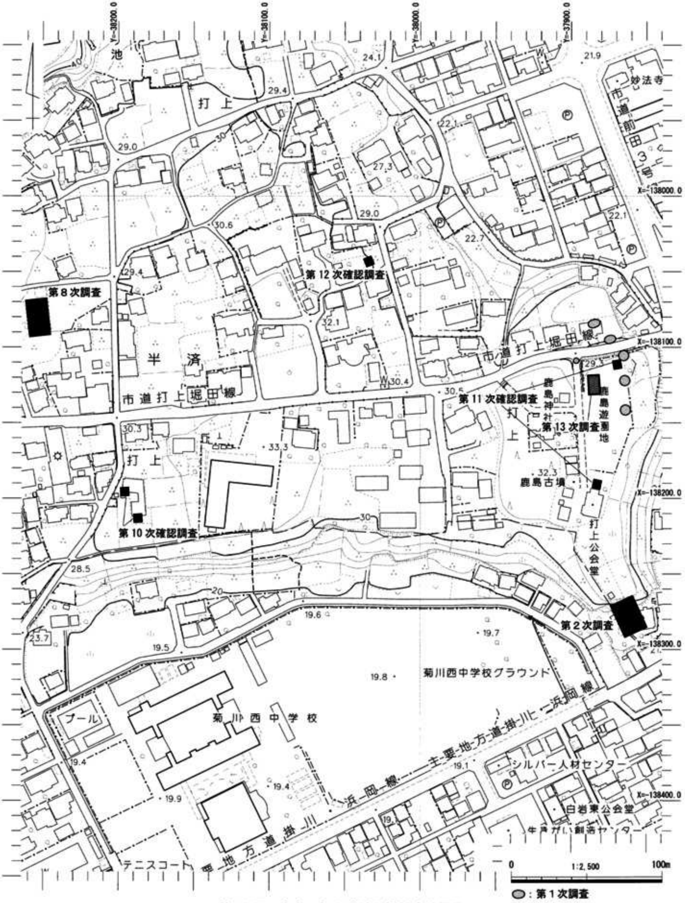
第２次調査では遺跡南東端の丘陵先端部分で方形周溝墓７基と古墳１基が検出されている（菊川町教育委員会 1992）。

第８次調査では古代の竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡２棟などが検出されている（菊川市教育委員会 2006）。

以上の２回の調査以外は試掘確認調査であり、今回の本発掘調査は第13次にあたる。第10図に示した第10次から第12次の調査は平成26年度に行った確認調査である。

第３表　鹿島・打上遺跡周辺遺跡一覧表

番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名
44	条里	前田坪遺跡	63	古墳	高田ヶ原南古墳群	98	散布地	小出遺跡
48	散布地	権左衛門遺跡	64	散布地	豆尻遺跡	109	散布地	白岩下遺跡
52	散布地	八斗田遺跡	65	散布地	栗林遺跡	110	散布地	白岩東狭間遺跡
53	横穴墓	西宮浦横穴群	66	散布地	八幡遺跡	111	散布地	白岩西狭間遺跡
54	横穴墓	大渕ヶ谷横穴群	67	古墳	八幡古墳	112	散布地	白岩段Ⅱ遺跡
55	横穴墓	山本横穴群	**68**	**散布地**	**鹿島・打上遺跡**	113	散布地	白岩段Ⅰ遺跡
56	散布地	堀田遺跡	69	古墳	大徳寺古墳	114	散布地	西袋遺跡
57	城郭	堀田城跡	70	散布地	前田遺跡	115	散布地	広原遺跡
59	散布地	堀田山遺跡	71	古墳	鹿島古墳	200	集落	西福寺西遺跡
60	集落	腰前遺跡	82	散布地	井成山(大頭龍)遺跡	219	古墳	正法寺古墳
61	古墳	高田ヶ原古墳群	83	集落跡	白岩遺跡	222	散布地	堀田東遺跡
62	集落跡	高田ヶ原遺跡	84	散布地	島遺跡	227	散布地	方吹遺跡



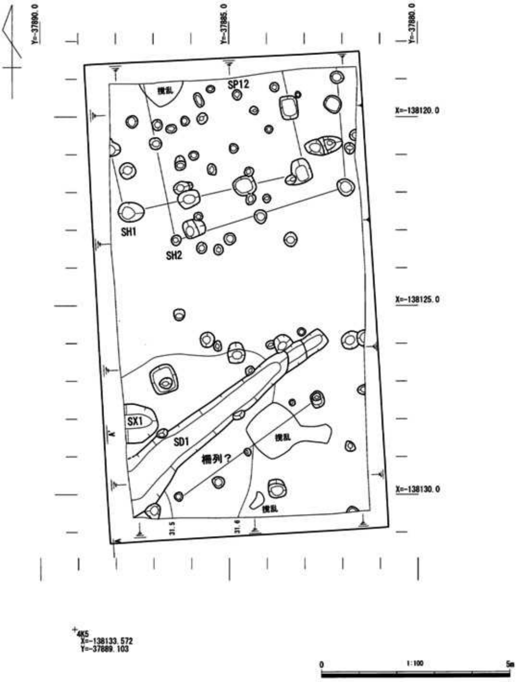
第10図　鹿島・打上遺跡発掘調査位置図

（3）調査結果

遺構（第 11 図）

今回の調査対象範囲は現地表面で 12.5 m × 7 mの長方形である。基本土層は第 13 図に調査区南西部の SD1 の土層断面とともに示したように、厚さ約 20cmの第 1 層が表土、約 16cmの第 2 層・にぶい黒褐色土層が公園整備に伴う整地層である。第 3 層の黒褐色土層は旧表土と考えられる。その下が黄褐色砂質土の基盤層であり、上面が遺構検出面である。

調査区全体で多くのピットを検出し、調査区北側で掘立柱建物を 2 軒認定した。他のピットとは様相が異なる 1 基の遺構は不明遺構（SX1）とした。調査区南側では溝を 1 条検出した。



第 11 図　鹿島・打上遺跡遺構全体図

SH1（第12図）

東西方向が3間の側柱建物で南北方向は1間分を検出し、調査区外北側に続いていると思われる。ピットからは小破片しか出土せず、実測できた遺物はない。縄文土器の破片とともに須恵器坏蓋の小破片、口縁部かえりの部分があり、時期は奈良時代以降と考えられる。

SH2（第12図）

SH1とほぼ重複し、東西方向が2間、南北方向は1間分を検出し、調査区外北側に続いていると思われる。ピットから土師器の小破片と須恵器甕の胴部片が出土している。SH1同様奈良時代以降と考えられる。

SD1（第11・13図）

北東から南西に直線的に伸びる溝で、幅120cm、深さ73cm、長さは6.5mを検出し南西調査区外へと続いている。北東端は階段状に浅くなり終わっている。溝の脇には交互に配されたように小さなピットが検出されている。埋土の観察からはピットの方が溝より新しいと判断される。

出土遺物の中で実測できるものはなかったが、縄文土器片のほか灰釉陶器碗の小破片（10世紀末から11世紀初ぐらい）、砥石の破片がある。

断面の形状などから古代から中世の区画溝と考えられ、土層の観察からは掘り直しが2回あったと推定できる。北東端が階段状になっていたことは溝内への出入りの便を図ったものかもしれない。

溝の南側にピットがいくつか検出されているが、柵列の可能性が考えられる。

SX1（第14図）

調査区南西、SD1の北側で検出された。幅は103cm、深さは36cm、調査区外へと続いていて、長さは85cm分を検出した。平面形は楕円形と推定できる。出土遺物はないが、覆土はSD1に近い印象である。

遺物（第15図）

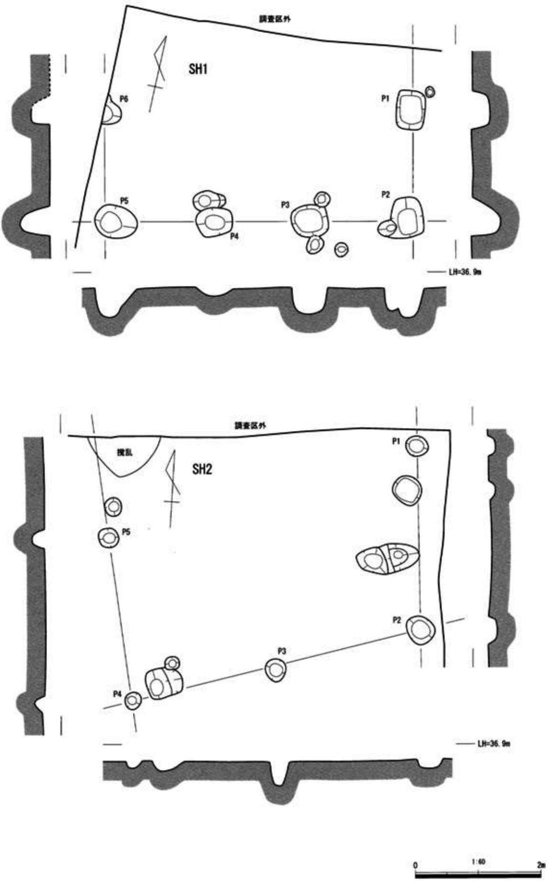
鹿島・打上遺跡出土遺物として実測図を掲載したものは6点であるが、4点が今回の調査時において出土したもので、2点は過去の確認調査での出土遺物である。鹿島・打上遺跡の全体像を少しでも明らかにするためにここに合わせて掲載した。

14は須恵器坏身の底部小破片で、無高台である。SP12から出土しているが、SP12では掘立柱建物などを復元することができなかった。15は須恵器坏蓋の口縁部破片である。16は灰釉陶器碗の底部破片である。17は灰釉陶器碗の底部である。高台は高く、端部は丁寧に丸く仕上げている。重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。

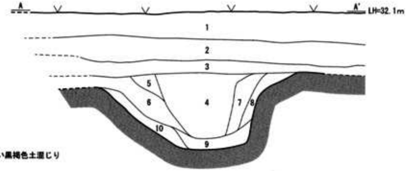
今回の調査による出土遺物は少なく、図化できた遺物が少なかったため、遺跡の全体を少しでも把握するため、第10次から第12次の確認調査の遺物も検討することとした。そして、次に示す18と19が遺跡の南西端付近で行われた第10次確認調査時に出土したものである。

18は灰釉陶器碗である。釉はハケ塗りで、内面は幅2.5cmほど、外面は口縁部5㎜ほどの幅である。自然釉も付着している。焼きぶくれがやや目立つ。重ね焼きによる融着により、内面にも痕跡、高台も荒れている。19は山茶碗の小皿で底部片。底面には回転糸切り痕が残る。

19の小皿以外は8世紀中頃から10世紀中～後葉の範囲に収まる。

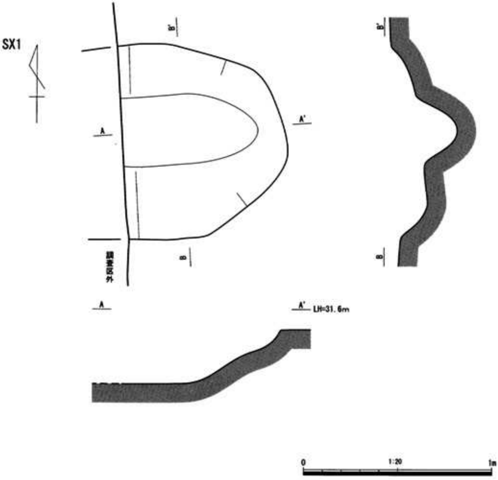


第12図　鹿島・打上遺跡SH1・SH2実測図

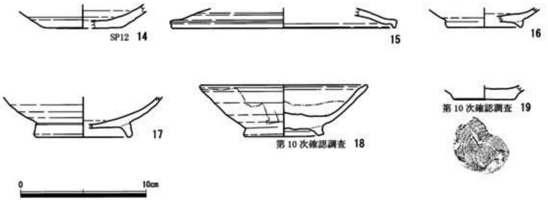


1 表土
2 にぶい黒褐色土
3 黒褐色土 にぶい黒褐色土混じり
4 黒褐色土
5 淡い灰黄褐色土 基盤層少量混じり
6 淡い灰黄褐色土
7 黒褐色土 黄褐色砂質土混じり 小粒の礫含む
8 黄褐色砂質土 黒褐色土少量混じり 礫含む
9 淡い灰黄褐色土 礫混じり
10 淡灰黄褐色土 黄褐色砂質土少量混じり 礫なし
黄褐色砂質土 礫混じり（基盤層）

第 13 図　鹿島・打上遺跡 SD1 土層断面図



第 14 図　鹿島・打上遺跡 SX1 実測図



第15図　鹿島・打上遺跡出土遺物実測図

第4表　鹿島・打上遺跡出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土位置・遺構	種別	器種	計測値（cm）				色調	残存部位	残存率(%)	時期	産地	備考
						口径	高さ	底径	高台径						
15	5	14	SP12	須恵器	坏身(無台)	-	(1.9)	(6.0)	-	灰	底部	20	8C前		
15	5	15	表土	須恵器	坏蓋	(17.8)	(1.6)	-	-	灰	口縁部	5	8C中		
15	5	16	表土	灰釉陶器	碗	-	(1.5)	-	(6.0)	灰	底部	25	Ⅳ-1	地元	
15	5	17	表土	灰釉陶器	碗	-	(3.2)	-	(7.8)	灰白	底部	40	Ⅳ-2	皿山	
15	5	18	第10次確認調査　トレンチ1	灰釉陶器	碗	(13.3)	4.1	-	6.3	灰黄	口縁部～底部	70	Ⅳ-1	皿山？	焼き歪れ
15	5	19	第10次確認調査　トレンチ1	山茶碗	小皿	-	(1.2)	(5.0)	-	黄灰	底部	50	Ⅲ-1		

径の（）は推定値、高さの（）は残存値

第3章　まとめ

子ヶ崎遺跡

開発地での公会堂建築に伴う過去の確認調査では奈良時代の柱穴が確認されていたため、今回の調査でも同時期の遺構の広がりが期待されたが、近世以降の暗渠状遺構と古代に属する可能性のある溝1条を検出したのみであった。しかし、包含層からではあるが8世紀頃の須恵器を中心に古代に属する遺物が出土したことは周辺域での遺跡の広がりを示唆するものであろう。子ヶ崎遺跡が位置する川上地区は律令制における城飼郡の河上郷に比定される地域であるため、今回の調査区周辺が古代の河上郷に関連する地域である可能性が高まったといえよう。

鹿島・打上遺跡

今回の調査では掘立柱建物跡2棟、溝1条、ともに明確な時期を決定できないが、古代以降の遺構を検出した。また、遺跡内の別地点での確認調査では山茶碗小皿が出土し、当該期まで集落が営まれていたことがわかった。

非常に小さい面積の調査結果であるが、過去の調査と合わせて考えると、古代の遺構は遺跡全体に広がっていると推定できよう。対して縄文時代、弥生時代は今回の調査地点、鹿島神社周辺に限定されるかもしれない。

鹿島・打上遺跡は南北、東西ともに約400 mの広がりをもった遺跡として登録されているが、これまでの調査は小さな面積ばかりであり全体像をつかむことはできていない。現在は住宅地の間にお茶を主とした畑が散在する状況であることから、今後も大きな開発はなく小規模な開発が散発するとみられる。鹿島·打上遺跡をより深く理解するためには、打上原のみでなく高田ヶ原丘陵周辺も含めて、過去の資料の整理を進める必要があろう。

両遺跡とも調査面積は小さいが、古代を中心とした資料を提供することとなった。郡衙関連遺跡である加茂地区の宮ノ西遺跡の報告書も刊行し、市内での古代の様相が徐々に明らかになりつつあるのだが、城飼郡としてとらえた時に、郡衙の位置が不明であるなど、まだまだ解明されてはいない。

平成29年度には鹿島・打上遺跡において今回の調査区北側で道路の拡幅工事が予定されている。そのような開発に対応して調査を進めることは当然だが、鹿島・打上遺跡第1次調査資料の整理、文献調査、城飼郡は市外も含まれることから、他地域の情報収集など、今後の課題は多岐にわたるといえる。そのためにも調査体制の強化から行う必要があろう。

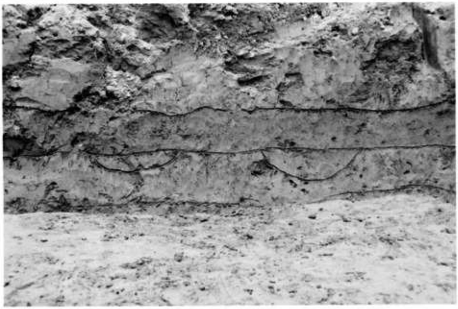
文末ではありますが、今回の調査にあたっては駐車場の提供などで子ヶ崎遺跡では川上自治会に、鹿島・打上遺跡では打上自治会に多大なるご協力をいただきました。出土遺物については松井一明氏にご教授いただきました。また、鈴木則夫氏の資料に関してはお孫さんの鈴木惟之氏をはじめご家族の方々にお話を伺いました。ここにしるして深く感謝いたします。

参考文献

小笠町教育委員会，1990：『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
小笠町教育委員会，1991：『寺の谷3号墳発掘調査報告書』
小笠町郷土研究会民俗部編，1983：『小笠町地名語源解説　東地区篇』
上半済打上五丁目郷土誌編集委員会，1987：『上半済打上五丁目郷土誌』
菊川町教育委員会，1992：『鹿島遺跡発掘調査報告書』
菊川町教育委員会，1998：『高田ヶ原遺跡第8次発掘調査報告書』
菊川市教育委員会，2006：『鹿島打上遺跡発掘調査報告書－第8次調査－』
静岡県，1992：『静岡県史　資料編3　考古三』
静岡県教育委員会，1977：『静岡県文化財調査報告書第16集　静岡県埋蔵文化財調査報告』
静岡県教育委員会，2001：『静岡県文化財調査報告書第55集　静岡県前方後円墳－資料編－』
中世土器研究会，1995：『概説中世の土器・陶磁器』
東海土器研究会，2015：『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』

写 真 図 版

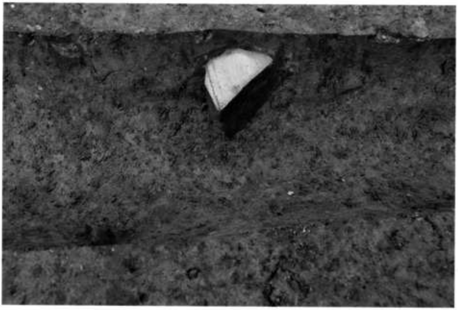
完掘状況
南より



東壁南端土層断面
西より

SD1 完掘状況
西より

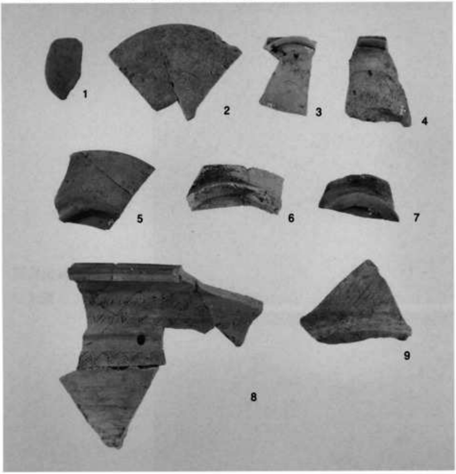
SD1 土層断面
南より



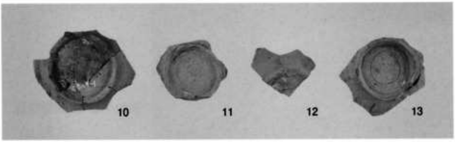
SD1 遺物出土状況

SX1 土層断面
南より

SX1 遺物出土状況



出土土師器・須恵器

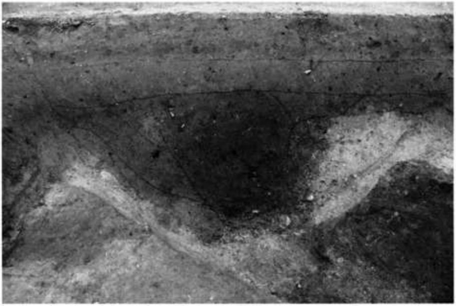


出土灰釉陶器

完掘状況
南より

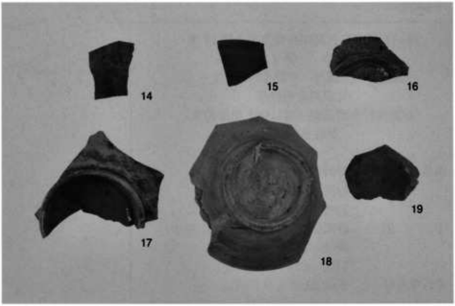
SH1・SH2 検出状況
西より

SH1・SH2 完掘状況
西より



SD1 土層断面
東より

SD1 完掘状況
西より



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	こがさきいせきだいにじちょうさ　かしま・うちあげいせきだいじゅうさんじちょうさ　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	子ヶ崎遺跡－第2次調査－　鹿島・打上遺跡－第13次調査－　発掘調査報告書
副書名	(耐震性貯水槽設置工事に伴う発掘調査)
巻次	
シリーズ名	菊川市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	高木　淳　蔵本　俊明
編集機関	菊川市教育委員会
所在地	〒437-1592　静岡県菊川市下平川6225　TEL0537-73-1137
発行年月日	2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
こがさきいせき 子ヶ崎遺跡	しずおかけんきくがわし 静岡県菊川市 かわかみあざこがさき 川上字子ヶ崎	22224	302	34度 42分 21秒	138度 7分 19秒	20150713 ～ 20150803	87.5㎡	耐震性貯水槽設置工事
かしま・うちあげいせき 鹿島・打上遺跡	しずおかけんきくがわし 静岡県菊川市 はんせいあざうちあげ 半済字打上		68	34度 45分 16秒	138度 5分 10秒	20150819 ～ 20150827	87.5㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
こがさきいせき 子ヶ崎遺跡	散布地	古墳時代～古代	溝	須恵器、土師器、灰釉陶器	
かしま・うちあげいせき 鹿島・打上遺跡	散布地・集落	古代～中世	掘立柱建物跡、溝、ピット他	須恵器、土師器、灰釉陶器他	

子ヶ崎遺跡は古墳時代から古代の遺物が検出され、周辺地域での集落の存在を推測させるものである。
鹿島・打上遺跡からは古代に属する可能性がある掘立柱建物跡が検出され、周辺地点での調査と総合して判断すると、当該時期の集落域である可能性が高まった。

菊川市埋蔵文化財調査報告書　第17集
子ヶ崎遺跡　－第2次調査－
鹿島・打上遺跡　－第13次調査－
発掘調査報告書
(耐震性貯水槽設置工事に伴う発掘調査)
平成28年度

編集・発行	静岡県菊川市下平川6225 静岡県菊川市教育委員会 TEL　0537-73-1137
印　　刷	静岡県御前崎市池新田5790-1 株式会社 松 本 印 刷 TEL　0537-86-2075
発行年月日	平成29年3月31日